

「湿地教育」の基本構造について

笹川 孝一 (法政大学)

SASAGAWA, Koichi (Hosei University)

sskoichi@hosei.ac.jp

1) 湿地教育の重要性と落とし穴

生命の源泉である「湿地」にかんする「教育」としての湿地教育は、産業革命以後の「近代化過程」で、ますます重要となっている。人体を始めとする多様な生命体は細胞と血管やリンパ管、消化管等、種の固有性に従って行われる、生命体内部とその外側での水の循環を正常に保つことが必要である。

しかし、外側での水の汚染や、飲食物や過度のストレスなどの、技術革新・市場経済・契約社会化・リテラシー社会化という近代社会が要因となって、上記のメカニズムが変調をきたしている。それゆえ、これらの生命体の内外での水循環を安定させるためには、水と水のある場所としての湿地と多様な生命体とのかかわりを視野に入れて、必要な諸能力の涵養を個人・集団・社会が意識的に行う必要がある。

したがって、湿地教育の要諦は、時代と社会の中で生きる個人や集団の「湿地体験」を豊かにしつつ、「体験の経験化」によって、表現を促し、作品化を通じて社会を貢献を行い、次のステージの湿地体験を組み立てていくための、認識力、判断力、実践力の涵養、育てあいをサポートする点にある。

そのための取り組みはいろいろと行われているが、「湿地体験」と簡単な意見交換、あるいは「湿地」に関する「知識」という情報伝達で済ませて、上記の全体を視野に入れていない場合も多い。また、「教育」に関する「発達段階」が意識されないために、大人の育てあいが視野から落ち、子どもに過度な要求をしている場合も少なくない。

2) 「湿地学」の構造について

上記の一連のプロセスを実行するためには、一方で、認識主体としての個々人や集団が既に持っている「湿地体験」とそれを基盤とする「何らかの湿地認識」を整理した「湿地学の構造」を想定する必要がある。それは、Ⅰ「湿地の分類学」、Ⅱ「湿地の自然学」および①「湿地の利活用学」②「湿地の保全・再生学」③「湿地の心理・教育・キャリアデザイン学」からなるⅢ「湿地の人間学」から成る。

3) 湿地教育実践の構造と能力論、「教育」「学習」論

そのうえで、湿地教育実践の構造を円環的に考える必要があるが、その際に湿地の能力論、capacity building と「教育」「学習」「learning」の検討が必要である。

4) 「湿地教育学」の発展方向

湿地教育についての学は手つかずだったが、朝岡幸彦編『湿地・海洋教育』筑波書房 2019 の刊行によって、今後率直な実証研究と理論研究が進む他考えられる。

キーワード：湿地教育 湿地学 認識過程 体験の経験化 learning capacity building